慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	壽里竜君学位授与報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2006
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.99, No.2 (2006. 7) ,p.311(141)- 316(146)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学位授与報告
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20060701-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」99巻2号（2006年7月）

学位授与報告

壽里　竜君学位授与報告

報告番号　甲第2284号
学位の種類　博士（経済学）
授与の年月日　平成16年5月27日
学位論文題名　「情念・想像力・文明社会——ヒューム文明社会認識の両義性——」

内容の要旨

本論文の目的は，第一に，情念と想像力に関するデヴィッド・ヒューム（1711–1776）の哲学的考察から，その文明社会認識を捉えなおすこと。第二に，そこから文明社会における不安定に対するヒュームの鋭敏な意識と，確実性と発展性を希求する啓蒙的な探求心の両面を読み解くことにある。

第一章「騎士道と人間本性」では，ヒュームの「騎士道と近代的名誉に関する歴史的論考」と題された草稿を中心に，アディソン，マンデヴィル，ハチソンらが示した騎士道への関心や，スコットランド啓蒙の知識人たちによる騎士道への歴史的関心の高まりについて概観している。これらの概観を通して，礼儀，洗練，社交，これら近代社会を形成し，ヒュームをはじめ他の啓蒙思想家らが重視した諸価値の歴史的起源の一つが騎士道にあること，同時にそれが非常に法外な行動様式（決闘など）を生み出していたことがひろく認識されていたことを明らかにしている。

第二章「想像力の帝国」では，処女作『人間本性論』第一編における空想，錯覚，偏見，権威などといった論点を中心に検討している。ヒュームは人間の蓋然的知識を構成する重要な役割を想像力，観念連合に与えたが，それらの概念が従来否定的に扱われており，それらを哲学の根本に据えることが非常に挑発的な含意をもっていたことを理解していた。同時にヒュームは，ロックらが直面していたイギリス経験論における一つの難問，正しい経験と間違った経験をいかに判別するのかという問題に，もっとも肉迫することになったのである。

第三章「情念の哲学」は，『人間本性論』第二編「情念について」において，とりわけヒュームのいう「間接情念」である自負の問題に焦点を当てている。この章の狙いは，これまで情緒主義的解釈によって道徳論との結びつきが曖昧になっていたヒューム情念論を，道徳とは区別された名誉論の流れに位置づけることにある。すでにマンデヴィルやハチソンは道徳と区別された名誉に焦点を当てていたが，ヒュームが間接情念の議論においてこの問題を引き継いでいること，同時に，比較・希少性・想像の錯覚という諸々の問題点についてのヒュームの認識を論じている。

第四章「道徳の方法」の議論の対象は，『人間本性論』第三編と『道徳政治試論集』にまたがっている。ヒュームは道徳という規範的な領域において議論をするにあたって，論説「エッセイについて」の中でその方法論について語っている。この論説で言われる「学識の世界」と「社交の世界」を前提にする哲学者の役割が，すでに『人間本性論』段階でも示されていたこと，また後に削除された論説に含まれる手法についても検討することにより，その方法論がどのように発展していったのかを追跡している。

第五章「党派と宗教」では，ヒュームが近代にのみ見られる現象と述べた宗教的原理の危険性を中心に，党派心が文明社会に対して与える不安定性について考察する。また，論説「グレート・ブリテンの党派について」の改訂や小冊子『スチュアート氏の態度と行動』の内容を検討することで，ヒュームの党派観が著述活動を通じて次第に深化し，通俗的なウィッグ観を脱していったことを明らかにする。

第六章「奢侈と文明」では，マンデヴィルにつづく奢侈論擁護の思想家として捉えられがちなヒュームの奢侈論を再検討する。従来，ヒュームは経済発展が実現する「勤労・知識・人間性」の連鎖によって奢侈を肯定したとされているが，同時にこの連鎖が場合によってはかならずしも安定的に発展しえないことをヒュームは自覚していた。ヒュームの奢侈に対する理解が無条件に文明社会を礼讃するものでないことを，本章は明らかにしている。

第七章「賢明な為政者と企画家」では，ヒュームの為政者・政治家・立法者像を考察している。ヒュームは，奢侈・貨幣・貿易・人口の問題を貫徹する「一般原理」への注目を「哲学者の仕事であり，また政治家の主要な仕事である」と述べていた。このことは，為

政者・政治家・立法者像が，彼の文明社会認識に深く関わっていることを示している。スミスの為政者像や企画屋の概念と対比させることによって，ヒュームが文明社会の安定的発展のために，賢明な個人の為政者や政治家にある程度積極的な役割を認めていたことを明らかにする。

第八章「「完全な共和国」論の現実性」では，『政治論集』の最終論説「完全な共和国に関する一案」を検討する。この論説は，冒頭部分のみから既存の政体の存在や漸次的改良を重視するヒューム思想の例証とされるか，ヒュームの共和主義の端的な表明とされるか，机上の空論の空しさを示すための風刺にすぎないとされてきた。本章では，ヒュームが現実にブリテンが共和国になることを一貫して拒否しながらも，なぜその大共和国案を「何ら重大な支障が見いだせない」理想的な政体であると主張しえたのか，その両面を明らかにしている。

第九章「文明の盛衰」では，従来の経済思想史において十分に検討されていなかったヒュームの文明観の一側面に注目する。ヒュームは，経済的発展によって公共精神の腐敗や堕落が生じるとする言説からはつねに距離を置き，「富国——貧国論争」と後に呼ばれることになる論争においても，貧国の追い上げは富国の経済の必然的衰退をもたらさないとの立場に立っていた。だが，その一方で，ヒュームはかならずしも文明社会が継続的に発展していくと考えていたわけではなく，つねに栄枯盛衰をくり返すとも考えていた。この経済思想史上のヒュームと，ヒュームの文明社会認識全般との関係を検討することによって，文明社会の脆さに対する鋭敏な意識が，商業と洗練が可能にした文明社会に対するヒュームの繊細な擁護を支えていることを明らかにする。

こうして検討してきた様々な主題から浮かび上がってくるのは，「文明社会認識の両義性」と表現するのがもっとも相応しいと思われるヒューム思想の一特質である。ヒュームは，欲望や想像そのものを排除しようとするのではなく，文明社会の安定的発展という観点から，いかにして欲望や想像のあり方を規定していけるのかを検討することこそ自らの課題としていた。洗練，中庸，人間性，これらヒュームが規範的な価値を負わせたと思われる諸概念は，われわれが考える効用や理性や自由などとある程度は重なり合いつつも，いずれも完全には合致しない。効用に対しては快適さを，理性に対しては感情を，自由に対しては権威をというように，あらゆるものの行き過ぎを警戒し，一つの基準に還元させない慎重な態度こそ，文明社会の両義性を直視しつづけたヒュームが貫いたものだったのである。

論文審査の要旨

1. 問　題

本論文はデヴィッド・ヒュームの文明社会論の体系的な考察を主題として織りなされた文明社会認識をめぐっての浩瀚な社会思想史的研究である。はじめに本論の目次を示せば以下の通りである。

凡　例
略記号表
序　章　第一節　研究史の回顧
　　第二節　本論文の狙い
　　第三節　本論文の構成
第一章　騎士道と人間本性
　　第一節　騎士道をめぐるヒューム以前の文脈
　　第二節　「騎士道」草稿の概要と評価
　　第三節　スコットランド啓蒙における騎士道論の意義
第二章　想像力の帝国
　　第一節　ヒューム以前の想像力と観念連合の理論
　　第二節　ヒュームの想像力と観念連合の理論
　　第三節　『人間本性論』の挑発
第三章　情念の哲学
　　第一節　名誉と徳の峻別
　　第二節　ヒュームにおける自負と道徳
　　第三節　情念の不安定性
第四章　道徳の方法
　　第一節　『人間本性論』と『道徳政治試論集』の方法論
　　第二節　『人間本性論』第三編における道徳論
　　第三節　論説「技芸と学問」における道徳論の歴史的展開
　　第四節　論説の削除と方法論の展開
第五章　党派と宗教
　　第一節　『道徳政治試論集』における党派分析
　　第二節　『スチュアート氏の態度と行動』における政治と宗教
　　第三節　トーリーとジャコバイトの関係

第四節　『イングランド史』における党派論
第六章　奢侈と文明
第一節　商業的な国民としてのイングランドの国民性
第二節　「奢侈」の肯定的理解と懐疑的理解
第三節　徳の守護者としての名誉心
第四節　名誉と規律
第五節　一般原理と偶然
第七章　賢明な為政者と企画家
第一節　ヒュームにおける為政者・立法者・政治家
第二節　賢明な為政者と企画家の構図
第三節　スミスの政治家・立法者像との対比
第八章　「完全な共和国」論の現実性
第一節　「完全な共和国」論に関する従来の研究
第二節　共和国化への動きと共和制についての認識
第三節　「完全な共和国」の制度的特徴——政体論と社会構造
第四節　「完全な共和国」論と，その後の展開
第九章　文明の盛衰
第一節　一般的原因と文明の盛衰
第二節　技芸・学問と商業の盛衰
第三節　「内的な抑御」と文明の盛衰
第四節　人間本性の普遍性と文明の盛衰認識
結論
あとがき
文献目録・索引

ヒュームの多面的思想は，現代の高度に専門化した人文・社会諸科学の現状においては，そのいずれかひとつに収めて理解することは困難である。アダム・スミスの，そしてまた同時にイマヌエル・カントの最も重要な先駆者の一人としてヒュームに与えられたその位置づけは，ヒュームを社会思想的研究の格好の対象としてきわ立たせてきた。しかしそのようなきわ立った位置づけがかえって，ヒューム思想の豊かな全体像の理解を阻む要因となってきたことも否定できないのである。

1960 年代以降の欧米におけるヒューム研究の復興をささえてきた経済思想，政治思想，哲学における代表的な諸研究はいずれも，近代文明社会の両義性に関するヒュームの認識を直接・間接に指摘している。しかしその一方でこれらの研究が，近代の市場経済社会や自由主義的政治社会の論理的・歴史的整合性に対するヒュームの楽観的展望やイデオロギー的擁護を強調していることに，壽里君は疑問を呈する。

本論文は，従来の研究の蓄積をこのような視点から批判的に理解吸収したうえで，ヒュームの思想，とりわけ，その社会科学的側面を基礎づける中核的概念を，近年の内外の研究動向にそって「文明社会」にもとめ，ヒュームの哲学的・歴史的議論における固有の特徴を抽出し，そこにヒューム思想の統一的理解の基盤を確立しようとする試みである。こうしてヒュームは「文明社会の無批判な賛美者ではなく，つねに批判的な視点を保っていた」(6 頁) と言う意味での “ヒュームにおける文明社会認識の両義性” の問題設定が生まれ，それがさらに，「人間の制度が秩序と混乱の両面を生み出さざるをえない」(同上) ことによる “情念・想像力・文明社会” の相互連関の問題把握に結実した。すなわち壽里君は，第一に，情念と想像力に関する哲学的考察からその文明社会認識を把握し，第二に，こうした把握によって，文明社会の構造的不安定性に対するヒュームの鋭敏な意識と，近代文明の確実性・発展性を希求する啓蒙的な探求心との両面を読み解こうとするのである。

2. 主要内容とその評価

以下，ほぼ章を追ってその主要な論点およびそれに対する評価を述べよう。

序章における壽里君の政治，経済，歴史，哲学という諸分野を横断する研究史の概観は，壽里君の問題設定に関連する限りで適切かつ有効であり，また従来の研究が未解決のままに残した空隙を細かく指摘する視線は鋭い。しかし他方，従来の社会科学的諸研究が，壽里君が主張するほどに，ヒュームを楽観的で一面的な文明社会の賛美者，擁護者として描き出してきたのかどうか，その点には疑問も残る。ヒュームの保守主義と自由主義の緊張の問題，貨幣論・貿易論における古典派的視点とケインズ的視点との併存といった古くからの解釈上の難問はその典型である。

第一章は，ヒュームの「騎士道と近代的名誉に関する歴史的論考」の数少ない本格的考察のひとつとして貴重である。壽里君はこの草稿を，ローマ帝国崩壊後のヨーロッパ社会の起源をめぐるヒューム最初期の歴史

認識を示す文献とみなし，彼のより成熟した歴史論や経済論との関連を示している。結果として，近代的道徳の主要な起源のひとつである騎士道（chivalry）がもつ洗練と野蛮，近代性と封建制との両義性をめぐる彼の認識の起源がすでにこの時期にあることが示されたが，その一方，伝統的道徳論としての騎士道道徳それ自体の考察はほとんど見られず，それとヒューム自身の体系的な道徳理論との比較は必ずしも十分にはなされていない。

第二章は，これまでヒューム知識論の中核的位置を占めると考えられてきた「観念連合」の理論がもつ社会認識上の意義を解明しようとしている。とりわけ，ロック，ハチソンなど経験主義の先駆者たちにおける同理論に対する否定的評価の見直しが，ヒュームにおいては，自然と人為，経験と教育といった二分法の廃棄の中に見出されること，それがまた文明社会の両義性をめぐる彼の社会科学的認識に基礎を提供し得たことの論証は力強い説得力をもつ。ただし，主題の観念連合はもとより，情念と情動，意見と信念といった基本概念について，原語の厳格な理解にもとづく明確な定義づけや意味の分析が欠如していることは遺憾である。

第三章は，近年の哲学的ヒューム研究が注目している情念論（とくにヒュームのいう間接情念の自負の問題）に焦点をあて，ヒュームの文明社会認識に対して有する方法上の意義と具体的な役割を論じている。名誉論と道徳論の区別と関連という興味ある視点からマンデヴィル以来のイギリス情念論の系譜上にヒュームの議論を位置づけ，文明社会の秩序の基礎である権威と権力をめぐるヒュームの議論の特徴を情念論によって解明する叙述には説得力がある。とくに，1．情念の相対性，2．新奇性，3．空想の錯覚という三つの切り口から社会秩序そのものの安定性と不安定性をめぐるヒュームの複雑な議論を解きほぐしていく記述は独創的である。しかしここでも再び，情緒主義，間接情念，感情，共感などの基本概念の明確な定義が不十分である。

第四章は，ヒュームの最初の著作である『人間本性論』と次の『道徳政治論集』との比較考察をつうじて，両著の問題関心の共通性と論述方法の変化を論じている。近代・古代の両文明社会における道徳と政治の関連の仕方を比較する手法は有効だが，とくに従来の研究に何かを加える独創性は見られない。

3．主要内容とその評価（続）

第五章は，ヒュームの党派論を文明社会の権威と愛着の構造という感情的基礎から考察することによって，党派論を文明社会論の個別的応用問題として理解している。とくにトーリーとジャコバイトとの異同をめぐるヒューム自身の思考の揺れと変化を各版の比較対照によって析出する手際は鮮やかであり，ヒュームの党派観が著述活動を通じて次第に深化し，通俗的なウィッグ観を脱していったことを明らかにした点は重要と言える。小冊子『スチュアート氏の態度と行動』の考察も貴重であるが，全体としては，既存の諸研究と比して，とくに独創的な議論の展開とはいえない。

第六章は，数あるヒューム経済論の諸問題のなかでも最もよく知られてきた奢侈論を取り上げ，情念，名誉，欲望といった本論全体の情念論的視角から新鮮な考察を展開している。従来の諸研究はマンデヴィル以来の重商主義的奢侈論との対比で，ヒューム奢侈論の古典派的性格を強調してきたが，壽里君は，そうした通説には収まりきらないヒュームの議論の幅と陰影を解明し，重商主義とは一線を画し，しかも文明社会の将来展望に無条件で楽観的でないヒュームの微妙な立場を浮き彫りにしている点で，本論文の諸章のなかでは最も成功している部分である。

第七章は，ヒュームにおける政治家，為政者，立法者の概念を比較・整理し，スミスとの対比的考察をも加えながら，文明社会における政治的指導力の役割を積極的に認めるヒュームの見解を論じている。ヒュームは，奢侈，貨幣，貿易，人口の問題を貫徹する「一般原理」への注目を「哲学者の仕事であり，また政治家の主要な仕事である」と述べていた。このことは，為政者，政治家，立法者像が彼の文明社会認識に深く関わっていることを示している。スミスの為政者像や企画屋の概念との対比によって，ヒュームが文明社会の安定的発展のために，賢明な個人の為政者や政治家にある程度積極的な役割を認めていたことが明らかにされている。スミスがヒュームとは異なって理想的政治体制を構想しなかった理由を両者の文明社会像の相違として説明する点など卓見が見られるが，この章の議論全体が本論文の主題とどのように関係しているのか，その位置づけは必ずしも明確ではない。

第八章は，ヒューム政治論のなかでも最も解釈が難しいとされている「理想共和国」論を正面から取り上げ，詳細な分析と考察を加えた点で貴重な貢献といえ

る。壽里君は，ヒュームが現実にブリテンが共和国になることを一貫して拒否しながらも，なぜその大共和国案を「何ら重大な支障が見いだせない」理想的な政体であると主張しえたのか，その両面を明らかにしようとしている。とりわけ，共和主義的な自由と商業の進歩の関連を論じながら，ヒュームの議論が制度と政体の改革による文明社会の秩序維持と安定性の確保（「民主政体の大規模化による利害の分散」122頁）に最大の力点を置いたことを示した点が優れている。

最後の第九章は，本論文全体を総括すべく，ヒュームの歴史観を文明の盛衰論として論じる。ヒュームは経済的発展によって公共精神の腐敗や堕落が生じるとする言説からはつねに距離を置き，「富国・貧国論争」と後に呼ばれることになる論争においても，貧国の追い上げは富国の必然的衰退をもたらさないとの立場に立っていた。だが，その一方で，ヒュームは文明社会の継続的発展を楽観していたわけではなく，その栄枯盛衰の反復を視野に入れていた。壽里君は，この経済思想史上のヒュームと，ヒュームの文明社会認識全般との関係を検討することによって，文明社会の脆さに対する鋭敏な意識が，商業と洗練が可能にした文明社会に対するヒュームの繊細な擁護を支えていることを明らかにしている。

以上のような多面的考察をつうじて壽里君が解明しようとするのは，本論文の副題に選ばれた「文明社会認識の両義性」と言うヒューム社会科学の一特質である。あらゆるものの行き過ぎを警戒し，一つの基準に還元させない慎重な態度こそ，文明社会の両義性を直視し続けたヒュームが貫いたものであったと，壽里君は主張するのである。

4. 全体的な評価と問題点

本論文全体の学問的意義および問題点を述べる。

(1) 従来の諸研究では固有に哲学的な議論と見なされがちであった情念や想像力の問題を，壽里君はあえて本論文全体の基礎的視角として設定し，その視角から政治，経済，歴史にかかわる重要な諸問題をめぐるヒュームの議論をほぼ網羅的に考察した。この努力をつうじて，多面的な思想家ヒュームの全体像に肉薄することに相当程度成功したといえる。同様の試みはこれまでにも数多くなされてきたが，本論文ほど主要な諸問題を網羅的に論じた例はまれである。設定した分析視点のある種の単純さと論文全体としての雑多な外観は否定できないが，むしろそれゆえに，ヒュームの思想の多彩さと複雑な陰影が鮮明に浮かび上がってくる。それを可能にするヒューム原典の綿密かつ広範な調査・研究，および膨大な数に上る内外の研究文献の手堅い消化・吸収に費やされた努力も同様に評価されねばならない。

(2) こうした手堅い網羅的な考察によって，ヒュームの文明社会像の内容理解が大きく深められた。従来の諸研究も決してそれを一面的に理解してきたわけではない。とくに，奢侈論，公債論，経済発展論における悲観主義の要素，党派論や政治的・道徳的腐敗論における同じく懐疑的要素はこれまでにも十分に論じられており，ヒュームにおける文明社会認識の両義性という認識それ自体は決して独創的な論点とはいえない。その意味において，本論文が総体として提示するヒューム文明社会像は，内外の諸研究を刷新するものというより，それらを補完するものと言うことができる。それにもかかわらず，壽里君が提出した数多くの分析視点とそれらに対応するヒュームの原典からの詳細な引用傍証は，多少煩瑣の観を免れない面があるとしても，ヒュームにおける近代文明社会の認識と展望が単純なものでなかったことを，あらためて印象づけることに成功している。

(3) こうした本論文の長所とともに，克服されねばならない問題点もある。とりわけ強調しておきたいことは，本論文の基礎概念（情念，共感，想像力，観念連合，スコットランド啓蒙，など）について，壽里君がそれらの概念の実質的内容を明確に描くことなく，あたかも説明不要であるかのごとくにそれを用いていることである。壽里君はこれらが自明の明確さをもっと想定しているのかもしれないし，あるいは，それら諸概念を思想史の錯綜した文脈のなかに置き直し，ヒュームにおけるその独自な用法や意味内容それ自体を歴史的に位置づけ評価・分析することを意図的に行っているのかもしれない。しかし対象を批判的に分析，評価する場合，そこで用いられる概念や言葉の厳密な内容規定が不可欠であることはいうまでもない。この点に一層の注意がはらわれたならば，本論文はなお一層の説得力をもつことができたであろう。

5. 結　論

上に指摘したような各章における内容的な問題点のほかにも，本論文全体に，なお改善されるべき技術的・形式的な問題点（訳語の不適切・不統一，冗漫な文体，誤記など）が数多く残っている。言うまでもなく，これらは今後の研究のなかで改善されなければならない。とはいえ，本論文が全体として，内外の膨大なヒューム関連の研究文献を消化した上で，明確な問題設定と分析視角によってヒューム文明社会像の豊かで複雑な全体像を提示することに成功していることに疑いの余地はない。本論文を博士（経済学）の学位を授与するにふさわしい業績と判定する所以である。

論文審査担当者

主査　丸　山　　徹（慶應義塾大学教授（経済学部）経済学博士）

副査　坂　本　達　哉（慶應義塾大学教授（経済学部）博士（経済学））

副査　池　田　幸　弘（慶應義塾大学教授（経済学部）経済学博士（Dr. oec.））

学力確認担当者

小　室　正　紀（慶應義塾大学教授（経済学部）博士（経済学））

中　川　　清（同志社大学政策学部教授　博士（社会学））

チョイ，イー ケエヨン君 学位授与報告

報告番号　甲第2285号

学位の種類　博士（経済学）

授与の年月日　平成16年5月27日

学位論文題名　Sustainable Development and the Malaysian Bakun Dam Development Strategy Revisited（持続可能な開発——マレーシア・バクンダムの開発戦略の再検討）

内容の要旨

On 8th September 1993, the Malaysian government officially announced the approval of one of the most expensive mega-projects in the economic history in the country — the Bakun dam project. The project, which is the largest in Southeast Asia, involves a complete and irreversible destruction of 69,640 hectares of forest ecosystem as well as forceful displacement of the entire indigenous population (some 10,000 people) living the Bakun region. The construction of the project is estimated to cost approximately RM9 billion of the tax payers' money (RM=Ringgit Malaysia, US$1=RM3.8).

Since then, the project has come under severe criticisms from the local and international NGOs, claiming it as socially destructive, environmentally unsustainable and economically misconceived. The Malaysian government, however, endorses it as one of the recipes in shaping the Malaysian economy towards achieving its long-term vision of growth — "Vision 2020". Under this vison, it is expected that by 2020, Malaysia will become a developed country on par with the advanced nations in the West.

It is worth noting that the above conflicting views in conceptualizing development process in Malaysia reflect two polar cases of sustain-